

# シリア避難民 支援活動



昨年10月から、当会はヨルダンでのシリア避難民支援を継続しています。シリア国内の内戦状況が激化する中、ヨルダンには25万から30万人の避難民が流入していて複数の難民キャンプが作られています。有名なのは4万人が住むザアタリキャンプですが、私たちはシリアとの北部国境から5キロに位置するラムサ市郊外のKAPキャンプ、およびアンマン市内やラムサなどの町に住む避難民支援をしています。

## 避難民キャンプと 防寒着や靴の配布

ヨルダンのシリアキャンプは、国連、王室系の慈善団体とともに治安機関が管理をされていて、避難民の出入りが非常に制限されているだけでなく、当会も最初に入ることさえ許されませんでした。8月に最初の訪問をして以来、継続して訪問をし、管理当局と顔見知りになり粘り強い交渉をし、地元の行政機関とも関係づくりをして、12月ようやく防寒着の物資配布が可能になりました。避難民の多くがはだしやサンダル履きなので靴なども配布しています。

KAPキャンプはもともと公園を建設する予定地だったところで、野球場を一回り大きくしたほどの敷地に1戸6畳くらいのコンテナがたくさん設置され、その中に各戸10名くらいの家族が身を寄せています。テントではないので風雨は防げるのですが、小さなキャンプのためトイレも水汲み場も2か所しかなく、セク

ハラなどを恐れて女性が一人で行くことは難しく、また支援もあまり届いていない場所です。

中東の冬は雨が強く風も強くてとても寒く、12月でも天気の良い日中は20度を超える日がある一方、夜になると一気に気温が下がり零下になる事もあります。1月には大雪がたくさんふり、あまりの寒さに締め切ったコンテナで暖房器具を使い一酸化炭素中毒のため9人家族のうち7人が亡くなるという事件も起きています。子どもたちの顔はしもやけで真っ赤です。

夏から秋に着のみ着のまま逃げ

てきた人たちが多く、「とにかく着るものが欲しい」「今のままでは子どもが寒くて死んでしまう」と訴えられました。日常的に不正や差別が存在するのを感じている住民たちの状況を考慮して、直接各戸に手渡しをすることにしました。喜びの声をもらいながら無事に終えることが出来ましたが、改めて難民の多くが物理的にも精神的にも困窮していることを痛感しました。キャンプの管理体制は複雑で、様々な立場の人たちと一定の距離感を保ちつつ上手に付き合っていくという事はとても難しいのです。



ようやく自由な形で住民との接触が許されて、各コンテナを訪ねるとみな堰を切るように話し始めます。「妹は夫を残して避難しました。夫とは連絡が取れていません。」「うちの子どもはシリアにいるときは学校が大好きだったのに今は行っていません。」「子どもの目薬を下さい。病院にも行かせてもらえない。」「友達と遊んでいたら警察の人に叩かれたんだよ。うるさいんだって。」「何でも良いから働かせてほしい。一緒にいる家族に父として夫として申し訳無い気持ちなんだ。」

ある日、別のキャンプでは、300人近い人が大型バスに群がっていました。命の危険を十分に分かっているながらも、キャンプでの生活に耐えきれずシリアへ戻るバスなのだと聞いて、生活の大変さを改めて感じました。あるコンテナでお茶をご馳走になった時、10歳のモハマド君に「将来は何になりたいの？ 夢はなに？」と聞くと、彼は少し考えて一言「なにも無いよ、なんにもわからない。」と答えました。自分自身の認識の低さと彼が放った一言にとてもショックを覚えた事があります。「普段の配布は投げられた物資を拾いに行くようなことが多く、手渡しで皆に配ってくれたのはみなさんが初めてです。ありがとう」と言われたときに、難民として生活するという事は、尊厳さえ奪われるのだと改めて理解しました。

## アンマンでの活動

首都アンマン市内で避難生活を送っている人々に対して毛布やストーブ、生理用品などの配布も実施しています。シリア人の多くは外貨などを持たず、一方でシリアの通貨価値は従来の半分以下になってしまったため、外国での生活は容易なものではありません。ヨルダンではシリア人の避難が始まって以来、住居の賃

貸価格が上昇していますし、物価はシリアに比べると高く、特に母子で避難してきた家庭は労働収入を得る事が出来ないため、支援物資や国連などによる僅かな支給に頼らざるを得ませんが、難民キャンプ外には様々な理由で難民登録をせ

ずに避難している人が多く、こうした人々は支援の対象から外れる事が殆どです。従って格差が大きく、難民キャンプのストレスとはまた異なる形で苦難が多いのです。難民キャンプの人たちは諦めきった明るさがありますが、町に入り込んでいる人々は表情も暗く硬い印象を受けました。

家庭訪問をすると薄暗い空っぽの部屋の中で親と子どもたちが身を寄せ合い、寒さに凍えながらも健気に日々生き繋ぐ姿に心を打たれることがしばしばあります。ある家族は、屋根があるだけましと言いながら、倉庫の片隅で商品に囲まれて住んでいました。ネズミが走り回る部屋や、何もないがらんとした土間に暮らしている家族もいます。別の家庭は簡単な敷物以外の物資は全くないような状況で、その晩をどのように過ごすかということに必死でした。また多くの家族が大変過酷な環境にあるにもかかわらず、受け取った物資のうちいくらかを、さらに過酷な環境下で暮らすシリアの家族のためにと取り分けて送っていると聞きます。シリア国内には400万人以上が避難先を転々として移動していて、地域によってはパンさえ買えないと言われます。「国内避難民」と言われるこうした人々には、政治的な理由もあって国連の援助も十分に届かず、これまで独裁とはいえ比較的安定した



暮らしをして危機に慣れていない多くの人たちが突然どん底に突き落とされた厳しさがうかがえます。

## 産科病院への医療支援開始

ヨルダンでは医療費が非常に高く、大きな難民キャンプ以外には避難民を受け入れる医療施設がほとんどありません。避難民の多くが子ども、女性、高齢者なので、アクセスのない多くの避難民は医療を求めて右往左往しています。そうした人たちを受け入れている一つが、アンマン市内の病院の一部を借りて運営されているシリア病棟です。特に産科病院への来訪者が多く、資金的に困難な状態にあるため、必要な緊急帝王切開手術ができないという状況にありました。そこで、産科病院への医療支援として医薬品を購入して、手術を可能にする支援も始めました。避難民には妊婦が多く、また栄養状態やストレスのために帝王切開が必要になるケースが多いのです。

## 冬休み子どもクラブ

学校の冬休みを利用してアンマン市内で活動しているシリア女性のNGOと一緒に子ども支援事業も実施しました。午前中は女の子クラス、午後は男の子クラスに分けて5歳～16歳までの子ども達合わせて毎日200名近い子どもが集い、笑顔を見せてくれました。クラフトや描画、合





唱、演劇など様々なプログラムが盛り込まれ、1月末には女子はバス遠足で小鳥の公園へ、男子はスポーツイベントを行い皆楽しく過ごしました。当初は極度の人見知りに陥って全く話さなかった子どもが安心して徐々に馴染んでいく姿や、自宅を爆撃された時の影響で耳が聞こえなくなっている子どもが新しい友達をみつけて、遊びの輪に加わって行く姿などは私たちにも勇気を与えてくれました。

## キャンプでの子ども支援

地元NGOとの連携など紆余曲折を経て、2月に入ってようやくヨルダン政府からの許可が下りて、KAPキャンプでも子ども支援とお母さん支援を開始しました。過酷な生活をしているキャンプの中でやっと本格的な活動ができるようになりました。

子ども支援は、キャンプ内で居場所がなく、大きなストレスを感じながら過酷な状況に置かれている子どもたちのための空間を設置し、心理的な解放と成長を促すのが目的です。様々な理由で学校に通っていない子どもが多く、また学校に行きたがらない子どもがほとんどなのです。初日は幼児から13歳まで30人の子どもたちが参加しました。まずは自己紹介を行い、円形に座ってもらい、シリアに伝わる昔物語をシリア出身の保

育士が話してくれました。その後、ミルクを皆で飲んで語り合い、折り紙を使って皆で「かぶと」を折りました。子どもたちの年齢差も大きいことから、大きな子どもにリーダーになってもらい、折り紙の折り方などを小さな子どもに教えてもらうようにしました。

物語の語り聞かせに、子どもたちは一様に目をかがやかせ熱中していました。キャンプ内は非常に物資が不足していることから、折り紙やミルクを配布すると奪い合うように取り、もらった分を隠してもっとほしがる子どもが多かったのですが、出来上がったかぶとを頭に乘せると、はにかみながら本当に嬉しそうな笑顔になりました。身の回りには灰色のもの、ゴミ、砂塵等ばかりで、きれいな色彩のものがいないことから、黄色とオレンジの色紙は、子どもたちにとって鮮やかな貴重なものと感じ

られたのです。母親は強いストレスにさらされており、目の前の子どもに十分な愛をかけるだけの心のゆとりがない状況の中で、保育スタッフの日常的なあたたかさに接し、多くの子どもが笑顔を見せてくれました。

2回目のワークショップは人数も増え、シリアの伝統的な子どもの遊びを行いながら円座になりました。その後、2冊の絵本の読み聞かせをして感想を聞いたり、絵本の中で使われている色や物をスタッフが指さし、その名前を答えるというゲームもしました。絵本の中で使われている基本的な色（赤、ピンク、オレンジ、黄、緑、青）の名前を正確に答えることができた子どもは6～7歳児のうち、一人しかいなかったのはちょっとびっくりしました。ほとんどの母親が教育を受けておらず、読み書きできない人が多いことから、子どもに対する基本的な教育の不足が強うかがえます。また新聞紙を使って大きな紙飛行機を各自が作り皆で飛ばして遊びましたが、学校に通っていない10歳以上の男の子たちが熱心に取り組み率先して飛ばしていたのは印象的でした。

## 女の子の問題、男の子の問題

13歳の少女は、兄に学校に行くなと言われていたことから、ずっと学校に行っていないが本当は行きたいと思っていると言います。折り紙を器用に折り、小さな子にも教えてあ



げていました。教育の機会を望みながらも、キャンプ内で学習の機会を得られず、子守をする毎日に耐えているようです。女の子たちの中には、男の家族に学校に行くなと言われていたり、学校ではヨルダン人にいじめられると言って、学校に行っていない子が多いようです。

学校に行っていないムスタファ、カーリッドら5人組の男の子は、キャンプの中で石を投げたりして毎日ぶらぶらしています。飲水を子どもに配布するときにリーダーになってもらい他の子どもにごみを集めるように声掛けを頼むと、率先してやってはくれるのですが、一つのことに集中することができずにすぐに走り回ってしまいました。男性がなかなか仕事に就けず、日中も寝ている父親もいることから、父親像が薄くなっていて、目標とする大人の姿を持ってない男の子たちの不安定な気持ちが察せられました。

## 友達ができる母親向けの活動

ワークショップでは、まず母親たちの悩みや不満を引き出していきます。生活の苦しさがまず一番の問題です。一人あたり月約2000円分のクーポンとおむつ1パック、ミルクが支給されますが、キャンプ内のスーパーで物を買うにはとても足りないのです。また、洗剤等が不足しているとのことでした。支援がだんだん減ってきたとの声もありました。

子育てに話が及びます。「いけないと思うけど、子どもを叩いてしまう」「子どもが夜中の1時まで起きている。シリアでは規則正しく生活して夜も早く寝ていたが、色々なショックで寝れない」といった意見が多く、ワークショップのトレーナーは、子どもを抱きしめて安心させてあげてほしい、できるだけ規則正しい生活をさせてほしいとのアドバイスしていました。



悩みや不満を打ち明けられたためか、その後は皆すっきりとし、終わりには子守唄を皆で歌い、晴れやかな顔をしていました。トレーナーはパレスチナ出身のヨルダン女性で、温かい感じがします。農村出身で学歴がほとんどない母親たちに対して、とてもシンプルな言葉を使って問いかけているのも好評です。

別の日、子育てについてのテーマで話し合いをした後、大きな画用紙を母親たちに渡し、好きに絵を描いてもらいました。さらに色を付けながら、シリアの伝統的な歌を一緒に歌いました。それから、前回途中で作成したバックに持ち手と紐を縫い付けて完成！ 普段は写真を撮られるのを嫌う女性たちも、完成させた喜びからバックと一緒に撮影に快く応じてくれました。こういう風子子育て相談、心理サポートと手仕事を組み合わせながらワークショップが進んでいます。

別の日には参加者の思いを聞きました。

「人生の目標」では、「シリアに帰りたい、シリアにいる家族に会いたい」「他のキャンプにいる家族に会いたい」がほとんどでした。また「生活の問題」では、夫が神経質になっており、すぐに怒る、自分を全然大切にしてくれないと書いた人が多く、就労できないことや、先が見えない状況に男性が非常に神経質になって、妻の心に大きな影を落としていることがうかがえました。また、子ども



が神経質になっていて、どう接したらいいものか悩んでいるという母親も多く見られました。

「人生の夢」は、ほぼ全員が「シリアに戻って、家を再建し、幸せに家族で暮らしたい」と切なる願いを持っていました。

7人の子どもを持つソマイヤさんは、「今まで、他の家族の女性とほとんど会話をすることがなく、お手洗いやシャワーを浴びるときにちょっと挨拶するだけだったけれど、このワークショップに参加するようになって互いのことを知り、一緒に歌を歌って悩みを分かち合えるようになったわ。こんな機会を与えてくれてありがとう」と語り、シリアの伝統的な歌を手拍子を取りながら聞かせてくれて、みんなとても盛り上がりました。夫不在の中で大家族を抱えるお母さんたちが一時でも笑えることがあればと思います。

(なおヨルダンでのシリア避難民支援には助成としてジャパンプラットフォームのご協力を得ています。)